

仙台圏における野菜生産の地帯形成

安井孝臣

(宮城県農業センター)

Regional Formation of Vegetables Production in Sendai Area

Takaomi YASUI

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

1 はじめに

宮城県の野菜生産を出荷量からみると、仙台市と名取市を中心とした圏域(6市10町1村、県内シェア46%)と、石巻市と矢本町を中心とした圏域(1市2町、県内シェア20%)の都市地域が極めて高く、とくに、仙台圏は著しい。

また、仙台圏は農業粗生産額に占める野菜の生産割合も高く(特化係数で2以上)、さらに野菜の粗生産額でも、40億円以上の市町村県内5カ所中、仙台圏では4カ所(仙台市、名取市、亶理町、山元町)を占めている。

そこで、仙台圏の中でも出荷量ならびに粗生産額が多く、経済立地的にも同心円の立地配置関係にある仙台、名取、亶理、山元それに岩沼を加えた5市町について、粗生産額の面から昭和41～50年の10年以内における品目の構成変化を比較検討し、都市近郊における野菜産地形成過程の特徴を明らかにしようとした。

2 研究結果ならびに考察

図1はいも類を含めた野菜の粗生産額の推移をみたものである。いずれの市町も47年までの伸び方に比べて48年以

降の伸び方は著しく、目を見張るものがある。これは例のオイルショックによる物価の高騰によるもの、仙台にみられるように50年にはやや落ちつきを取りもどしている。

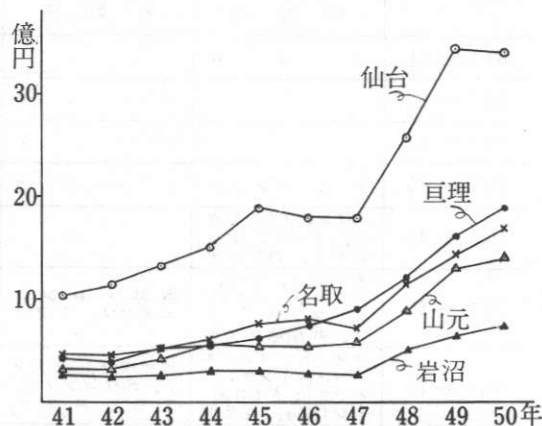


図1 野菜(いも類を含む)粗生産額の推移

表1 野菜粗生産額の80%をカバレッジする品目数と第1位品目のシェアおよび類別比率

	品 目 数			第1位品目のシェア(%)			類 別 比 率 (%)					
	昭41	昭45	昭50	昭41	昭45	昭50	果 菜 類			葉 茎 菜 類		
							昭41	昭45	昭50	昭41	昭45	昭50
仙 台	12	14	14	16	14	13	24	21	25	47	52	45
名 取	15	15	15	18	19	17	36	41	43	50	47	49
岩 沼	14	11	11	16	30	42	47	50	68	34	30	20
亶 理	12	8	3	28	43	71	66	74	89	21	16	7
山 元	12	9	6	28	29	59	64	67	84	19	23	11

表1は粗生産額の80%をカバレッジする品目数と第1位品目のシェア、および野菜の類別比率の推移をみたものである。まず、品目数についてみると、仙台および名取はこの10年間で変らないかふえている。一方、仙台から15km圏外にあり、阿武隈川以南の亶理および山元は41年当時は仙台と同じく80%をカバレッジするのに12品目を要していたのに、10年間で段階的に減少し、50年には41年の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ の3乃至6品目で80%に達してしまう。このことは、かつては自給野菜の生産で、種々雑多な品目を生産していたものが、後述するように特定品目に収斂したためである。岩沼は仙台から10～15km圏に位置しているが、45年頃までは亶理や山元と同様、品目は減少している。しかし、その後は変らず11品目を維持している。このことから岩沼は仙台、名取と亶理、山元の間での存在と位置づけられる。

つぎに基幹となる品目のウェイトをみるために、第1位品目のシェアを調べた(図2)。

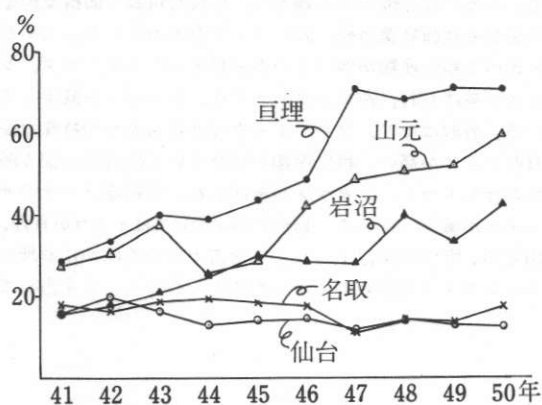


図2 第1位品目のシェアの推移

図からも明らかなように、仙台および名取はいずれの年も20%を越えたことがなく、仙台にあってはわずかではあるが減少して行く傾向さえみえる。つまり、傑出した基幹品目が形成されず、多品目多量生産方式とでもいうべき品目拡散の方向に進んでいる。これに対し、岩沼以南はいずれも増加傾向にあり、基幹となる品目を中心に少品目を多量生産する方向に進んでいる。亘理と山元は共に自然立地条件を生かしての株冷イチゴの施設栽培によるもので、かつては露地栽培が主であったが、45~46年頃から施設の導入が盛んとなり、栽培技術の向上や優良品種の導入と相ま

って飛躍的に発展し、野菜粗生産額の50%以上を占めるまでになった。岩沼も亘理、山元ほどではないが、施設栽培によるキュウリで同様の発展をみている。

イチゴ、キュウリといった果菜類が岩沼以南で大きな比重を占めていることが明らかとなったが、類別比率をとってみると、41年当時すでに今日の下地は形成されていたようで、仙台から遠くなるにつれ比率は高くなっており、その傾向は50年でも変わらず、岩沼以南は特に著しい。一方、仙台と名取は葉茎菜類が中心で、過去10年間45~50%を維持している。ついで仙台では根菜類が、名取では果菜類が占めている。

表2 市町村別粗生産額における品目のシェア(昭50)

	仙 台 市	名 取 市	岩 沼 市	亘 理 町	山 元 町
80.1%以上	パセリ				
60.1 ~ 80		セリ			
50.1 ~ 60		フキ		イチゴ	
40.1 ~ 50	カブ、ニンジン	ミョウガ			
30.1 ~ 40	ホウレンソウ、レタス、ミツバ、シュンギク、カラシナ				イチゴ
20.1 ~ 30	キャベツ、ネギ、タマネギ、ゴボウ、カリフラワー、シソ、非結球ツケナ	露地メロン、エダマメ、ミツバ		シュンギク	
10.1 ~ 20	ナス、ピーマン、エダマメ、インゲン、ハクサイ、ダイコン、パレイショ、ニラ他	ピーマン、カラシナ、ホウレンソウ、フロッコリー	ピーマン		ピーマン、ニラ、フロッコリー
5.0 ~ 10	キュウリ、トマト、カボチャ、トウモロコシ、ニンニク、ラッキョウ	キュウリ、トマト、ナス、カボチャ、スイカ、ハクサイ、タマネギ、レタス、カリフラワー、カブ、シュンギク他	キュウリ、スイカ、露地メロン、カラシナ、ミツバ、フロッコリー、非結球ツケナ	トマト、ピーマン、スイカ、フキ、フロッコリー	ナス、スイカ、パミ
計	32	23	8	7	7

表2は個々の品目について、昭和50年における県全体の5%以上のシェアをもつ品目を示したものである。仙台では1類市場である仙台中央卸売市場に最も近いこともあって、面積当りの収益性が高いツマモノや周年生産地で比較的栽培期間が短く、しかも鮮度を重んじる軟弱葉茎菜類が高いシェアを占めているが、連作障害回避や土地の有効利用、あるいは労働力の問題等で、比較的粗放で面積支配型の品目も軟弱野菜同様、高いシェアを占めている。10年前と比べて粗生産額が伸びている品目としてネギ、カブ、レタスが挙げられ、逆にホウレンソウ、キャベツが減少している。名取はセリ、フキ、ミョウガといったやや特殊な品目のシェアが高い。粗生産額が伸びている品目は上記3品目のほかトマト、エダマメが挙げられ、非結球ツケナやサトイモが減少している。岩沼以南についてはイチゴが亘理、山元の2町で80%以上のシェアを占めているほかに亘理のシュンギク(施設栽培)が仙台に次ぐ高いシェアを占めて

いる。粗生産額が伸びている品目は上記2品目のほかに岩沼のキュウリ、トマト、ピーマン、山元のナスが挙げられる。

3 ま と め

仙台圏において野菜出荷シェアの高い5市町(仙台、名取、岩沼、亘理、山元)の野菜粗生産額を、昭和50年までの10年間について、粗生産額の80%をカバーする品目数、および第1位品目のシェア等から検討した結果、仙台および名取は品目数については増加もしくは不変で、特定主要品目の比重は低く、多品目多量生産の品目拡散傾向を示している。これに対し、岩沼、亘理、山元は特定品目へ収斂し、少品目多量生産としての基幹品目形成への展開を示している。このことから前者は都市近郊の野菜産地として、後者は輸送野菜産地的性格をもつものとして位置づけられる。